

縁あって会社や組織に所属し、現在、従事している仕事に対して、どれだけ全力を尽くして取り組んでいるでしょうか。

〔最後まで誠実にやり抜こう〕という決心こそが、「まごころ」の第一歩となります。

大規模言語モデルやデジタル化などが加速する現代においては、効率が最優先されがちですが、多くの経営者が最終的に行き着く境地があります。

それは、テクニクや戦略を超えた「誠意を尽くす」という原点への回帰です。どれほど業界が複雑化しても、事業の根幹を支えるのは、目の前の取引先・顧客や社員に対する嘘偽りのない姿勢、すなわち経営者の「まごころの純度」に他なりません。

古くから、「まごころに新旧なし」という言葉があります。数千年前の人間が丸木舟を作る時に込めた熱意も、現代のエンジニアが最新のロケットを打ち上げる情熱も、その根本にある「飾りのない一所懸命な心」に違いはありません。

あらゆる情報が可視化される今日だからこそ、小手先のテクニクに頼らない経営者の純粋な誠意が、何よりも強い信頼の礎となるのです。

誠意とは「目に見えない細部への配慮」の積み重ねです。例えば、日本の優れた建設現場では、近隣住民の日常を守るために驚くべき「音」への対策が講じられています。単に防音の布を設けるだけでなく、最新技術で騒音を打ち消す逆位相の音を発生させたり、重機の振動を抑える特殊カバー



「まごころ」という 不変の羅針盤

を装着したりと、平穏な暮らしを支える工夫が凝らされています。

ある会の経営者モーニングセミナーで見られる光景も、その一例と言えるでしょう。座席に記された「エアコンの風が当たる」という丁寧な表示や、未会員への貸出本に施された特製ブックカバーなど、こうした一見非効率に見える「小さな誠意」は、損得を抜きにして相手の幸せを願う心から生まれています。

この愚直なまでの姿勢を貫くことは、決して容易ではないでしょう。だからこそ、多くの企業が効率を優先して切り捨ててしまっている「細部にまで心を配り続ける」ことは、他社には容易に真似できない独自の価値となります。この「まごころの純度」が、競合を寄せ付けない模倣困難な強みとなり、次の十年、二十年と組織を支える経営資源となるのです。

また、誠意を尽くすプロセスにおいて、経営者自身の魂も磨かれていきます。どれほど困難な壁に直面しても、それを「自らのまごころを試す機会」と捉え直すことで、経営者としての品格が高まります。

目の前の仕事や人に対して一点の曇りもないまごころを注ぎ切る。その積み重ねこそが、停滞した状況を打ち破り、不可能を可能にする力を生み出していくのです。

今日という一日、目の前の一つの仕事から、小さなまごころを積み重ねていきましょう。その歩みこそが、揺るぎない未来を築く確かな道となります。